

from M

第3号

郷土史資料室・きしわだ自然資料館

平成13年1月9日

[from M]編集部 スタッフの横顔

[from M]も無事に第3号を迎えることができました。先生方からのご質問やお問い合わせも少しずついただけるようになり、編集部の刺激になっております。どうぞこれからもよろしくをお願いします。

岸和田には、歴史、文化、自然に関すること、さまざまな専門家があられますが、我々若手(?)もがんばっています。こんな質問は誰に聞けばわかるだろう?こんな情報をもっているのは誰だろう?というとき、[from M]のメンバーが頭の中に少しでも浮かんでくれば、私たち編集部としてはたいへん光栄なことです。また、そうした先生方のご質問や情報が私たちの研究活動や教育普及活動のやる気の源と言ってもいいかと思います。そこで、今号と次号の2回にわたって、執筆や編集を中心になって行っているスタッフの自己紹介をしたいと思います。普段どんな仕事をして、どんなことを考え、どんな研究をしているのかということが皆さんに少しでも伝わればいいなと考えてのことです。今回は、郷土史資料室に所属している2名のスタッフの自己紹介です。

山中吾朗 (郷土史資料室)

郷土資料館に勤めて丸10年になります。私の専門は歴史(日本中世史)なのですが、学校の先生方は、岸和田の歴史についてどのようなイメージを持っておられるでしょうか。

岸和田の歴史を振り返ってみますと、特に歴史上の著名人が出たということもありませんし、日本の歴史を揺るがす大きな事件があったわけでもありません。もちろん、地域の独自の歴史は存在することは言うまでもないのですが、それが、例えば歴史の教科書に登場したり、小説や大河ドラマに取り上げられたりというような事象ではないために、マイナーなイメージをもたれている方が多いのではないのでしょうか。

しかし、郷土史—最近はこの言葉はお国自慢的な歴史になりやすいとして、あまり使われませんが、ここではあえて郷土史と言います—では小さな歴史的事実の発見が、意外に地域住民の関心を得ることが多いようです。町内の小さな寺院が、住民の予想以上に古い歴史をもっていたり、家を建て替える際に発掘調査をすれば弥生土器が出土したり、日本史全体からみれば些細な史実であっても、地域の歴史的営為が一つずつ明らかにされることによって、次第に郷土史像が豊かなものとなっていきます。

一つの例をあげますと、桃で有名な包近は、平安時代に成立した別名(べつみょう)の名残が近世の村名、そして現在の町名となったものです。別名とは、11世紀頃に成立した国の徴税

単位＝所領の一つです。包近の地名が約1000年におよぶ由緒ある地名であることを、果たして住民の何割がご存知でしょうか。

私の仕事は、こうした些細な史実ではあっても、それを市民のより多くの方々に知っていただけよう、展示・講演会その他各種の手段で普及してゆくことだと考えています。ようするに地域の歴史の掘り起こしです。

学校の先生方にも是非ご協力いただいて、今後も新たな郷土史の発見とその普及に努めていきたいと考えています。

山岡邦章（郷土史資料室）

私の本業は最近「旧石器捏造事件」で一躍有名になった、埋蔵文化財の発掘調査の技師です。事件以前は発掘調査をしていると「にいちゃん、小判でえへんか？」とよく聞かれたのですが、最近では「ゆうべ来て埋めたんとちゃうの？」と冗談交じりに言われます。でも、あれって私たち考古学に携わる者の奢りが表面化したことでもあるのかなとも思うこの頃、もっともっと考古学は広く一般的にならなければと反省しています。それに伴いこのfrom Mの位置づけもますます重要になってくると考えています。from Mは本来、フロムミュージアム＝“博物館より”って感じのものなのですが、現実問題、私の所属する郷土史資料室には、郷土資料館はありますが考古学系の施設はないに等しい状態です。そして私の本来の業務は遺跡の発掘調査ということで、一般的にはかなり知られない存在、つまり朝、発掘現場に行ったらずっと現場に居て、夕方事務所へ帰ってくるということが多い、普及啓発活動もあまり行えない環境にあります。ですからこのfrom Mなどでまずは考古学をもっともっと知ってもらいたい、小難しいことは抜きにして、より身近に考古学を感じてもらえたらと考えています。

そんな中で最近あったことなのですが、一例として紹介したいことがあります。岸和田市内の某焼き肉食べ放題店でのことです。妻と食事をしていると、隣に若い二十歳前後の女性が二人座りました。そして焼き肉を食べ始めたのですが、その机の炭火に暑さを感じたのか一人がこう言いました。「このむっとする暑さって昔、小学校で土器を焼いたの思い出せへん？」もう一人が「そやなあ。暑かったよなあ」そしたら最初の一人が「あのときの土器どうしたん？」って聞いたんです。すると「私、まだ家の玄関にかざってる」と答えたのです。するともう一人も「私もまだ本棚の上にあるわ」と言っていました。この会話、たまたま隣で聞いてしまったのですが、非常にうれしく思いました。私はこれでいいと思うのです。私たちは子供たちに考古学者になってもらおうとは考えていません。記憶に残って欲しい、知的好奇心の素材として身近に感じて欲しいんです。ですからあの子たちにとって土器焼きとは小学校時代の原体験として、どういう形であれ記憶に残ってくれている、いい授業だったんだなあと感じました。

学校での学習は知識としての記憶と、体験としての記憶の両輪でバランスがとれるものと考えています。そのうちの体験としての記憶のお手伝い如果能したら、それで博物学的なことをわかりやすく、体験的に伝えることができれば最高の学習になるのではないのでしょうか。もし、これをお読みの先生方でそういった授業をお考えの方、私にご一報をいただけたらできる限りのお手伝いをしたいと思います。

「カモかんさつ」のすすめ

最近、ようやく一般に理解され始めた感のある「バードウォッチング」。現在は、住宅地近くのため池を双眼鏡で観察していても「鳥を見てるのだな。」と、たいていの方が理解してくださるが、ひと昔前は「のぞき」などと間違われ、えらい目にあった方が少なくなかった（特に男

性)。私も学生時代、某国際会議期間に怪しい者として、職務質問を受けたことがある。それが今や、アウトドア雑誌の巻頭特集に取り上げられたり、中高年の高尚な趣味として紹介されるのであるから、時代というのは分からぬものである。

さて、このバードウォッチングだが、岸和田ではまさにこの季節が「はじめ時」である。なぜならば、「大きい・きれい・見分けが付きやすい・あまりちょこまか動かない」鳥であるカモのなかまが、10～3月の期間中、700あまりのため池や川に、シベリア方面から大挙して押し寄せるからである。ふつう、鳥類の大部分は警戒心が強く、人の姿を確認するとすぐ逃げてしまうので、姿を見るのはむずかしい。

しかし、カモのなかまは池の環境によるものの、餌付けされているものや公園や住宅地の池にいるものはあまり逃げないし、逃げたとしても少し待っていたらもとに戻ってくるので、学校の近くに池などがあった場合、授業の素材にするのにたいへん適した鳥類である。

岸和田には約13種のカモが、冬のあいだにやってきているが、よく見られる種類はそのうち5種類（マガモ・コガモ・ハシビロガモ・ホシハジロ・キンクロハジロ）。これに、1年中いる「カルガモ」をプラスして覚えておけば、岸和田市内では通用する。そして、カモと良く似たカイツブリ（カモよりだいぶ小さい）と、サギのなかまをついでに押さえておけば、ため池の冬の鳥の70％は制覇したといっても過言ではない。もし、分からない鳥が出てきたら、当館が今年の春に各校にお配りした「水辺で見られる22種の鳥」ポスターを見て欲しい。しかし、それでも不明な鳥があった場合は「珍鳥」の可能性が高いので、資料館の私「西中」までご連絡いただけたら、幸いである。それでは、最後に岸和田で、児童らが安全にカモを見ることができて、逃げにくい池と、そこでよく見られるカモの種類を紹介しよう。

●岸和田城堀（ホシハジロ・餌付けされている）●栄の池（総合体育館前・コガモ・餌付けされていないが逃げない・水抜きされていることが多いので注意）●摩湯山古墳の堀（マガモ・ホシハジロ・餌付けされている・城東小学校横の池も良い）●蜻蛉池公園の大池（ホシハジロ・キンクロハジロ・餌付けされている・コブハクチョウが飼われている）●久米田池（カモ13種全部・ただし10・11月か、3月末に限る）。また、下松町の新池・久米田中学校近くの花田池・流木町の今池なども良い。もし、カモで自然学習をされる場合は、ご相談ください。貸出用双眼鏡もありますよ。

自然資料館学芸員 西中美穂



Q & A のコーナー

Q：ケナフを何株か育てているのですが、ケナフを使って紙すきができると聞きました。その方法などを教えてください。また、ケナフの特性などを教えてください。

（八木南幼稚園・坂口先生よりの質問）

A：ケナフ（学名：*Hibiscus cannabinus*）はアフリカ西部の原産で、アオイ科の植物です。最近、ハンバーガーの包装紙などでもおなじみだと思いますが、日本ではケナフがかなり流行(?)になっているようです。その理由は、CO₂の吸収能力が高い（これには異論もあります）と言われており、「自然にやさしい」というキャッチフレーズで種子が配られていることや、収穫

後に紙すきとして使えるので、子どもの教育に活用できることなどがあります。しかし、ケナフが本当に自然にやさしいのかという点については、疑問もあります。その疑問点というのは以下のようなものです。

ケナフの原産地はアフリカ西部で、日本のその他の植物に比べ、成長力が高い。そのため、帰化植物としてセイタカアワダチソウのように日本の植物を駆逐し、圧力をかける可能性がある。ケナフはCO₂をよく吸収するので、CO₂の削減に役立つと考えられていますが、これは間違いではないか。なぜなら、「CO₂の吸収」と「CO₂の削減」は別である。ケナフは日本では一年草なので、年内に枯れてしまう。だから、吸収したCO₂はすぐ分解されて、空中に放出されてしまう。・・・など（「け・ke・ケ・KE・ケナフ？」より）

紙すきに関しては、子どもの体験としては大変いいことだと思います。ケナフで紙すきをする事自体には問題ありませんが、紙すきなら他の植物を用いても可能です（イネ、ヨシなど）。また「帰化植物がどれだけ日本原産の植物に圧力をかけているか」という問題は重大です。その意味で、ケナフに対する扱いは慎重にならざるをえません（私はオススメできません）。

ケナフを使った紙すきの方法について

- 花の終わったケナフを刈り取る（のこぎりなどで刈り、葉などを取り除いて皮をむいて天日で乾燥させます。茎には少しトゲがあるので、軍手などをはめてするとよい。花が10月末～11月のようですから収穫時期はそのころになります。）
- ケナフをはさみで小さく切り、柔らかくなるまで鍋などを使って煮込む（約1時間）
- 煮上がったケナフをあらって、木づちでたたく（皮は、ほとんどつぶさなくてもいいのですが、芯はよくつぶした方がいい。）
- ミキサーに水とケナフを入れて、紙のもとを作る
か性ソーダを加えたお湯（5%液）を使うとよりいいそうです。
- すき網やさらしを使ってすく。繊維が流れないように道具を工夫してみてください。
- 風通しの良いところで乾燥させる。ドライヤーやアイロンも可能。
- ・・・ケナフを木づちでたたいてつぶすところまではだいたい同じ過程のようですが、ここからはいろいろ方法があるようです。難しい方法もあるようですが、最もカンタンと思われる方法を書きました。難しい方法を使うと、よりキレイな紙ができるようです。

（参考）ケナフをめぐる生態学的な問題については、「け・ke・ケ・KE・ケナフ？」

URL: <http://www.ne.jp/asahi/doken/home/charoko/kenaf/index.htm>

が分かりやすく、かつ専門的な内容で詳しい。紙すきについては、

「ケナフの会」 URL: <http://www.kenaf.gr.jp/> など、多数。

自然資料館学芸員（非常勤） 村上健太郎

【from M】では、みなさまのご意見、ご感想、ご質問等をお待ちしております。博物館での学習、研究等に関する情報、地域の自然環境や歴史に関する面白いトピックスなどがありましたら、投稿文の方も受け付けております。お名前、連絡先、所属等をご記入の上、下記のところまでお送りください。電子メールでも受け付けております。なお【from M】はホームページ上でもご覧になることができます。ぜひご利用ください。

連絡・問い合わせ先

〒596-0072 岸和田市堺町6-5

きしわだ自然資料館

TEL (0724)23-8100 FAX (0724)23-8101

Email: knature2@sensyu.ne.jp

k-nature@sensyu.ne.jp

自然資料館ホームページ URL:

<http://www.sensyu.ne.jp/k-nature/index.html> (Yahoo Japan の検索で「きしわだ」と入力すれば、カンタンです)